



イサム・ノグチと岡本太郎

—越境者たちの日本—

2018年10月6日(土)–2019年1月14日(月祝)

イサム・ノグチと岡本太郎は、1950年、日本アヴァンギャルド美術家クラブの主催により東中野のレストラン「モナミ」で開催されたイサム・ノグチの歓迎会において、初めて出会いました。日米の間で自己のアイデンティティに関する葛藤と向き合い引き裂かれながらも、彫刻家として世界的に活躍したイサム・ノグチと、青年期の10年間をパリで活躍しながらも大戦の為に日本に戻り引き裂かれ、日本の芸術界を異邦人としての眼で見ることができた岡本太郎は、それぞれに欧米で芸術家として活躍し始め、越境者として日本文化を見つめ、新たな表現活動を展開しました。同世代の二人の個性的な芸術家が日本の美術に触発されて制作した作品は、共に戦後の芸術界に大きな影響を及ぼしました。



イサム・ノグチと岡本太郎 北鎌倉の夢境庵にて
1954年4月1日

本展は、イサム・ノグチと岡本太郎という個性の異なる二人の越境者の作品を通して、「日本」あるいは「日本美」とは何かについて再確認するための機会として開催します。

開催概要

展覧会名: イサム・ノグチと岡本太郎 —越境者たちの日本—

会期: 2018年10月6日(土)–2019年1月14日(月祝)

会場: 川崎市岡本太郎美術館

時間: 9:30–17:00(入館 16:30 まで)

休館日: 月曜日(10月8日、12月24日、1月14日を除く)、10月10日、12月25日、
12月29～1月3日

観覧料: 一般:1,000円(800円)、高校・大学生・65歳以上:800円(640円)
中学生以下は無料、()内は20名以上の団体料金

主催: 川崎市岡本太郎美術館、美術館連絡協議会、読売新聞社

協賛: ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

協力: 堀内カラー

〈お問い合わせ〉

川崎市岡本太郎美術館 展覧会担当:佐々木、篠原 広報担当:佐藤

TEL:044-900-9898 / FAX:044-900-9966 / MAIL:pr@taromuseum.jp

〒214-0032 神奈川県川崎市多摩区枳形 7-1-5 生田緑地内



みどころ

- イサム・ノグチと岡本太郎、世界的に活躍した2人に焦点をあてる展覧会として初めて開催！
- 越境者としての二人が見つめた「日本」をそれぞれの作品を通じて紹介。
- イサム・ノグチと岡本太郎、それぞれの作品を絵画、彫刻、写真、資料、計約150点で紹介。

1章 イサム・ノグチと岡本太郎の交流

イサム・ノグチ(1904-1988)と岡本太郎(1911-1996)は1950年に日本アヴァンギャルド美術家クラブ主催によるイサム・ノグチの歓迎会において初めて出会いました。ノグチと岡本はすぐに打ち解け、フランス語で語り合ったといいます。この章ではノグチと岡本の出会いと交流、そして「日本」へ深い関心を持つ、個性の異なる二人の芸術家の接点をたどります。

2章 1950年代のイサム・ノグチと岡本太郎

1950年代はじめ、「逆コース」の政策の下に「レッド・パージ」が行われ、日本の民衆は不安を抱きました。岡本は「縄文土器論」において従来、美的観照の対象とされていなかった縄文土器に着目しました。一方、ノグチが特に興味を示したのは古墳時代の埴輪・雪舟・茶道具などであり、「日本石器時代の土偶」でした。この章では1950年代のノグチと岡本の作品に見出される「日本」観の相違について紹介します。



久国寺《梵鐘・歓喜》除幕式のイサム・ノグチと岡本太郎
1965年10月24日

3章 芸術と保存、そして破壊：イサム・ノグチと岡本太郎の場合

イサム・ノグチが建築家・谷口吉郎と協働で制作した慶應義塾大学構内のスペース萬來舎(ノグチ・ルーム)の移設の事例と、岡本太郎による旧東京都庁《日の壁》の陶板壁画の取り壊しの事例を基に、芸術の保存と破壊について考察します。



慶應義塾大学 萬來舎(ノグチ・ルーム)内観 1951-52年頃
©The Noguchi Museum / ARS - JASPAR

4章 ジャポニスム・ジャポニカ・伝統論争

狭義のジャポニスムは、1900年代初頭には収束するとされますが、近年では1960年代、さらには現代にまでジャポニスムの系譜は続いているとする説もあります。アメリカ国籍のイサム・ノグチが創作したデザインや作品は、「ジャポニスム」の範疇に含めてもよいのでしょうか。戦後間もない1950年代の日本では、経済復興のために輸出用に制作された粗悪な美術工芸品は「ジャポニカ」と呼ばれていました。1955-56年には、「伝統論争」が展開され、日本のデザインは刷新されていくこととなります。この章では、ノグチと岡本、同時代の芸術家の作品を通じて日本のデザインについて考察します。



岡本太郎《日の壁》旧東京都庁舎



5章 生活の中の芸術

イサム・ノグチも岡本太郎も、芸術と人々の生活の関係について慎重に取り組んでいます。1951年、ノグチは岐阜提灯の造形に魅了され、《あかり》シリーズを生み出し、剣持勇との協働による《コーヒー・テーブル》《スツール》を、そして北大路魯山人の陶房では、様々な陶による作品を生み出しました。

岡本太郎は、1950年代初め頃より陶による作品制作に着手しました。《坐ることを拒否する椅子》や《ひもの椅子》、《光る彫刻》、《顔のグラス》など多岐にわたる創作も行いました。この章では、二人の生活の中の芸術について紹介します。



イサム・ノグチ《あかり》1953年～ 香川県立ミュージアム
©The Noguchi Museum / ARS - JASPAR

6章 それぞれの挑戦—「日本美」との対決

互いに表現形式は異なるものの、イサム・ノグチも岡本太郎も、ともに「日本」を外側の立ち位置から見つめ、新たな表現形式の「日本美」を創造しました。「伝統論争」を経て、いよいよ新たな様式が生み出された1960年代に、ノグチと岡本が残した作品を紹介します。



岡本太郎《光る彫刻》1967年

7章 庭 —空間の彫刻

彫刻と人間の関係、そして環境——。それは、イサム・ノグチにとって創作上の重要なテーマでした。ノグチの芸術は、彫刻と人間とを包み込む場としての庭、あるいはプレイグラウンドの創作へとつながっていきます。一方、岡本太郎は、1936年に《傷ましき腕》で抽象絵画の中に傷ついた腕を写實的に描き、抽象芸術と人体との関係性へと興味が展開していたと考えられます。そして、作品の内側に人間を内包する場として、《マミ会館》や《太陽の塔》などパブリックな空間への創作へとつながっていきます。ここではノグチと岡本にとって重要な創作上のテーマであったといえる、芸術と人と場について紹介します。

展覧会関連イベント

■記念講演会「萬來舎とノグチ・ルーム」

日時：11月4日(日) 14:00～

講師：渡部葉子(慶應義塾大学アート・センター 教授)

会場：川崎市岡本太郎美術館 ガイダンスホール(定員 70名)

料金：無料

■記念講演会「イサム・ノグチとパリ・ユネスコ庭園」(仮題)

日時：11月25日(日) 14:00～

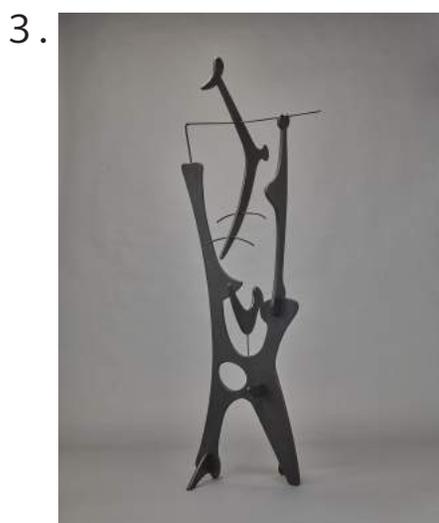
講師：グラジナ・スベリテ(ヴェネツィア・ペギー・グッゲンハイム・コレクション美術館 学芸員)

会場：川崎市岡本太郎美術館 ガイダンスホール(定員 70名)

料金：無料

イサム・ノグチと岡本太郎

—越境者たちの日本—



画像キャプション

画像をご使用の際には、必ず下記キャプション・クレジットをご明記くださいますようお願いいたします。

1. 1954年 イサム・ノグチと岡本太郎 北鎌倉の夢境庵にて
2. イサム・ノグチ《あかり》1953年～ 香川県立ミュージアム蔵 ©The Noguchi Museum / ARS - JASPAR
3. イサム・ノグチ《鏡》1944年（1994年鋳造）香川県立ミュージアム蔵 ©The Noguchi Museum / ARS - JASPAR
4. 岡本太郎《明日の神話》1968年 川崎市岡本太郎美術館蔵
5. 1952年「渡欧記念岡本太郎展」（於大阪高島屋）会場のイサム・ノグチ、山口淑子、岡本太郎
6. 岡本太郎《愛》1961年 川崎市岡本太郎美術館蔵
7. イサム・ノグチ《広島原爆慰霊碑の習作模型》1982年（オリジナル1952年）
イサム・ノグチ庭園美術館（ニューヨーク）蔵（公益財団法人イサム・ノグチ日本財団に永久貸与）

©The Noguchi Museum / ARS - JASPAR